

品川神社 例大祭



< 平成24年6月8日(金) ~ 10日(日) >

品川宿

平成24年9月5日発行
品川第一地域センター
(03-3450-2000)



ら5石の社領の朱印を受け、寛永14年(1637)に三代徳川家光公が東海寺を建立した際には、境内の一部がその敷地となったため、代替え地を賜りました。また、神社の位置が東海寺の鬼門に当たることから、同社の鎮守として江戸幕府の庇護を受けるようになりました。

品川神社(鎮座地 北品川三丁目七番十五号)は、北品川宿の鎮守で北の天王様として人々に親しまれています。創立は、鎌倉時代の初め文治3年(1187)に、源頼朝公が安房国洲崎大明神を勧請したものと伝えられ、室町時代以降も土地の豪族や豪商の庇護を受けました。天正19年(1591)には、徳川家康公

この大都会・東京の真ん中で、広がる異空間に自然と心ひかれてしまうのである。見慣れてしまった高層ビルやマンションが立ち並ぶ景色と、脈々と受け継がれてきた格式高い伝統文化。このコントラストが人々の心を魅了してやまない。少し立ち寄る程度のももりが、太々神楽の奉納が終わった頃には、いつの間にか、かなりの時間が経過していた。とても贅沢な時間を過ごした気がした。



太々神楽の奉納だった。厳かな雰囲気の中、奉納は粛々と進む。太々神楽のゆつたりとした舞に、心が穏やかに静まる。ふと周りを見回すと、地元住民やら観光客が、真剣な表情で見つめている。



『祭』の表情
祭りといえば、神輿と出店。淡い期待を胸に、急な54段の階段を上り、神社を見上げると妙な感覚に陥る。正装に身をまとった神主や総代、惣町が、引き締まった表情で一列に並んでいた。

品川拍子

神輿の品川拍子は品川天王祭が行われる北品川・南品川・東品川の限定された地域において、笛と大拍子によって神輿の運行を指揮する独特の拍子であり、神輿はこの拍子(曲目)に合った担ぎ方をしなければならないという他に類をみない価値の高い貴重な文化芸能です。

品川神社の天王祭には、締め太鼓を神輿に取り付け、笛と太鼓の拍子で氏子中を渡御する慣例になっており、この拍子の源は、明治時代になってから小関の島田長太郎氏が、品川神社太々神楽の太鼓の拍子に、江戸の囃子の笛の拍子を採り入れ、現在のような品川拍子に集大成したものと考えられています。

神輿の宮入り

品川神社を目指し、神輿を担ぎながら急な階段を登っていく様は、祭りのクライマックスといえる場面の一つです。担ぎ手は、階段を登っている最中も、神輿を左右に振るのでそのダイナミックな光景に見物客はハラハラしながら見守ります。階段を登りきった時には、大きな歓声と拍手が沸き起こりました。



【参考文献】

- 品川区史料(六)品川の天王祭
しながわの史跡めぐり
品川神社の太々神楽
(筆者: 佐藤 高)
発行: 品川区教育委員会

氏子町会

- ・ 北品川二丁目町会
- ・ 八ッ山町会
- ・ 北品川一丁目町会
- ・ 北品川三丁目親和会
- ・ 袖ヶ崎新興会 ... 宮本町会
- ・ 御殿山町会 ... 今年の年番町会
- ・ 小関親睦会

品川神社太々神楽

〔東京都指定無形民俗文化財〕

品川神社の太々神楽は、社記によると元亀年間(1570~73)の発生と伝えられています。昭和38年には東京都技芸文化財に指定され、その後、条例改正に伴い昭和51年に東京都指定無形民俗文化財(民俗芸能)となりました。

その特徴は、神職が奉仕する神前舞であること、龍笛を用いること、品川拍子という拍子が独特のものであることです。

太々神楽は品川神社の神楽として、宮司・小泉家に相伝されてきたもので、現在は昭和47年に結成された「品川神社太々神楽保存会」の会員諸氏の日々の努力によって、年に4回(元旦祭・春祭・例大祭・新嘗祭)の祭礼の際に、拝殿で奉納され続けています。

また品川神社の里神楽は、品川区東大井の間宮朝臣氏を元締とする間宮社中の方々により演じられています。里神楽は、江戸時代から神楽師により伝承され、間宮社中の江戸里神楽は国の重要無形民俗文化財に指定されています。

なお、品川神社には、慶長5年(1600)に徳川家康公が奉納したと伝えられる国常立尊面(天下ひと嘗めの面)と翁面をはじめ、天狐面、龍神面等の古面が宝物として所蔵されています。

中神輿(大正13年作成)
例大祭では、屋根に「天下ひと嘗めの面」を付けて氏子町内を渡御しました。重さは380貫(約1.5トン)もあります。

